

何故私は国立がんセンターから放医研に移ったのか

1970年代から放射線医学の急速な進歩が始まった。診断及び治療へのコンピュータ利用特にX線CTに代表される画像工学、粒子加速器による癌治療、短寿命アイソトープ特に陽電子放出各種による診断(PET)等ががんの診断と治療に導入されるようになった。国立がんセンターにはこのような事態に対応できる研究部門特に医学物理部門がなかった。国内では放射線医学総合研究所だけが対応できる研究所であった。これが私の移動の原因であった。

1971年に私は放医研で計画していたサイクロトロンによる速中性子線による癌治療の研究に加わることになった。しかし私は速中性子線治療は本命ではなく、将来は重粒子線治療とPETの時代になることを予想していたので、抵抗や困難はあったが、放医研の方針を変更させることに努力した。

1980年以降は私の予想通りの時代となり、放医研の重粒子線治療加速器の建設とPET関係機器の開発が急速に進んだ。1994年に放医研で重粒子線治療が開始され、優れた治療成績が次々と発表された。1998年には国立がんセンター病院の陽子線治療が開始された。国立がんセンターと放医研は良好な協力関係を保つことになった。